

学校から見た 図書館との 連携



学校教育における「読書活動」と 図書館のかかわりについて

谷戸第二小学校教諭

真家 裕美

「この本の続きが読みたい。」
子どもたちは、本が大好きである。小学校での教育活動において読書活動は、とても意味のある活動の一つである。学校にある学校図書館、そして、市の図書館。子どもたちの周りには、本にふれる機会がたくさんある。特に、様々なジャンルの作品にふれることができる図書館は子どもたちには、魅力的な場所であろう。だからこそ、小学校と図書館との連携がさらに必要になってくるであろうと考える。

私たちの小学校では、学級文庫としての団体貸出や低学年に向けての「図書館の時間」として、谷戸図書館を利用していただいている。学級文庫では、教師側が子どもに読ませたい本を指定し、その種類の本をお借りする方法と毎週設けてある「図書の時間」を使って図書館に行き、児

童が読みたい本を自分で選ぶといった活動が行われている。これによって、お友達がどんな本を読んでいるのか、こんな本もあるんだといった選択の幅も広がった。また、図書館の利用を低学年から行うことで、学校以外でも図書館を利用する児童も増えた。さらに、低学年向けに行われる「図書館の時間」では、学期に一回、その時期にあつた読み聞かせを行っていただいている。学校にはない大きな本や図書館の方の工夫をこらした読み方などで、子どもたちは目を輝かせて聞き入っている。このような活動が、「本っておもしろいな」といった気持ちにつながっていくのだろう。また、中・高学年では、教科に際して調べ学習ができるようにと、その内容の本を集めて貸し出してもらうといった利用もしている。学校図書館だけでなく、たくさんの資料を見ることができるとても役立つている。

小学校では、保護者による読み聞かせを行っているクラスもあり、サークルが図書館職員を講師に招いて開く学習会(どんな本を選んだらいいか、どのように読むといいか)に参加する保護者も多く見られる。このように、図書館と小学校は様々な場面でかかわりあっている。きつと、公施設である図書館と学校の関係は、とても大切で、さらなる連携が必要であると思う。

図書館はよきパートナー

—必要な本を子どもたちに届けるために—

芝久保小学校・上向台小学校

学校図書館専門員

森下 明子

小学校の図書室に学校図書館専門員として入って七年が経ちました。現在芝久保小学校と上向台小学校の二校に一日置きに勤務しています。蔵書の少ない学校図書室にとって公共図書館は日常的に必要な不可欠な存在です。毎週二〜三回は「こんにちは」と芝久保図書館に寄ります。

今「学校図書館と図書館の連携」という言葉がよく使われます。連携とは「たがいにれんらくし合いながら、いっしょに物ごとをすること」と辞書にあります。つまり一方的に資料を借りるだけでは連携とはいえません。単なる利用です。子どもと本を結ぶ、読書活動を推進するパートナーとして私たちは何を返せるのだろうかと自問自答してきました。私の答の一つは情報の交換です。毎日学校の図書室に立ち、子どもと本に囲まれ、先生からのこんな本がほしいという声を聞いています。図書館の児童サービス担当職員に現場の声をカウンセラーごしに伝えながら、ちゃんと交流の場があつたらいいなとも思っています。子どもや先生には図書館のよさを伝え、利用をすすめています。例えば、今年の夏休みのすいせん

図書「いわたくんちのおばあちゃん」を借り、二学期の六年生の「平和学習」の時に読みました。原爆の体験談を学校で語る内容が、今の子にも伝わりやすく、読み聞かせにもぴったりだったことを、先生と六年生の反応も交えて、司書の方にも伝えました。学校では団体貸出の制度を使って、「学級文庫」、「調べ学習」は無論のこと、行事、見学、保健等じつに様々な場面でも資料を借用しています。これも校内に司書がいて必要な本は集め、不足は市の図書館から借りて用意できることが、年とともに浸透してきた成果だと思っています。

お借りした本は毎週木曜に配達便が届きます。重い本の運搬が減り、とてもありがたいです。本が届くと希望した所へブックトラックに乗せて「本の出前」をします。必要で十分な資料を子どもと先生に届ける私たちの仕事は、市の図書館サービス資料(人)にしっかりと支えられています。



小学生に読書の楽しさを伝えるためには、本のことをよく知っている公共図書館司書や学校図書館専門員、教員が中心になって情報を交換しあい、お互いに持っている知識や資料を有効に活用する努力が必要です。これからも連携を深め、活動を続けていきたいと思っています。